

聴覚提示された尊敬および謙譲表現の理解

——日本語母語話者の場合——

宮 岡 弥 生*

1. は じ め に

近年、日本語の敬語の誤用が増加している。特に目に付くのは、謙譲語を尊敬語として使用する誤りであろう。例えば、デパートの店員が客に対して、「あちらで伺ってください」と言うのは、尊敬語で表現すべき客の「聞く」という行為について、謙譲語の「伺う」を用いている点で誤っている。また、時折、駅のアナウンスで「〇〇方面へお越しのお客様は、△△駅でお乗り換えしてください」と言っているのを耳にするが、これも、尊敬語で表現すべき「乗り換える」という乗客の行為を、謙譲語の「お～する」を用いて表現しているので、誤りである。正しくは、前者が「あちらでお聞き（になって）ください」、後者が「お乗り換え（になって）ください」である。

店員が客に対して「あちらで伺ってください」と言うような誤用は、謙譲語の機能を正しく理解していないための誤りである（菊地，1997）。また、駅員が乗客に対して「お乗り換えしてください」と言うようなものは、謙譲語の語形に尊敬語の機能をもたせて使っている誤用である（菊地，1997）。つまり、謙譲語の機能と語形を正しく理解していないところに、このような誤用が生まれる原因があると思われる。この背景には、尊敬語と謙譲語の使用頻度が影響している可能性がある。実際、日本語母語話者の間で謙譲語の使用率が低下していると言われている（国立国語研究所，1983; Yamashita, 1983）。これは、一つには、尊敬語は人物を主語とするどんな動詞にも使われるのに対して、謙譲語は人物を主語とし、さらに人物を補語とする動詞でなければ使われない（菊地，1997）からであろう。さらに、自分の動作は謙譲語であらわさなくてもそれほど失礼にはならないが、尊敬語の場合には相手の動作を尊敬語であらわさなければ失礼になる場合がある（菊地，1997）のも大

* 広島経済大学経済学部准教授

きな理由であると考えられる。

以上のように、謙譲語の機能と語形を正しく理解していないことによる誤用が目につくことから、尊敬語と謙譲語とでは、謙譲語のほうが難易度が高いのではないかと予想される。しかし、これまで、実証的な方法で、尊敬語と謙譲語の難易度を直接比較した研究は未見である。そこで本研究では、尊敬語と謙譲語を直接比較できるように統制した刺激を用いて実験を行い、両者の難易度を比較する。

さらに、この難易度は、厳密には敬語を理解する場合の難易度と、産出する場合の難易度の2つに分けて考えるべきであろう。理解と産出には、それぞれ視覚的なもの（文字言語）と聴覚的なもの（音声言語）の2種類があり、視覚的な理解（読む）と産出（書く）、聴覚的な理解（聞く）と音声的な産出（話す）は、個別に取り扱うのが適切である。これら四者の中で、コミュニケーション上もっとも基本的かつ重要な技能は、「聞く」こと、つまり、聴覚的な理解であると思われる。本研究では、この聴覚的な理解において尊敬語と謙譲語のどちらが難易度が高いのかを明らかにするために、日本語母語話者に対して文を聴覚提示して敬語表現の正誤判断課題を課し、反応時間と正答率を測定した。

2. 方 法

2.1 実験に用いた刺激文のデザイン

本研究では、正誤判断課題によって反応時間と正答率を測定する実験手法を用いた。そのため、表1にあるように、刺激文は「正しく肯定すべき刺激文」（提示された文が「正しい」と判断するのが正しい刺激文）と、「正しく否定すべき刺激文」（提示された文が「正しくない」と判断するのが正しい刺激文）とで構成されている。さらにこれらは、「尊敬語を含む文」と「謙譲語を含む文」とに分かれている。また、基準となる文（基本文）として、敬語表現を含まない正文を設定した。これは、分析の際の統制群としての役割を果たしている。なお、「基本文」の「正しく否定すべき刺激文」は、全体の刺激数の増加を防ぐために、分析の対象

表1 実験に使用した尊敬語を含む文と謙譲語を含む文の刺激文の例（動詞が「見る」の場合）

文の種類	正しく肯定すべき刺激文	正しく否定すべき刺激文
尊敬語を含む文	社長は昨日、社員の鈴木部長の絵をご覧になりました。	私の母は先月、学長の絵をご覧になりました。
謙譲語を含む文	私は昨日、上司の鈴木部長の絵を拝見しました。	学長は先月、私の母の絵を拝見しました。
基本文	斉藤君は昨日、友達の吉田さんの絵を見ました。	

とはしないダミー文の中の否定反応の刺激文で代用させることとした。

例えば、表1のように、動詞が「見る」の場合、「正しく肯定すべき刺激文」（以下、「正文」と記す）の「尊敬語を含む文」は、「社長は昨日、社員の鈴木部長の絵をご覧になりました。」である。また、正文の「謙譲語を含む文」は、「私は昨日、上司の鈴木部長の絵を拝見しました。」となる。一方、「正しく否定すべき刺激文」（以下、「誤文」と記す）は、敬語表現が誤って用いられている文である。例えば、「私の母は先月、学長の絵をご覧になりました。」は、謙譲語を使うべきところに尊敬語を使っている点で誤った文である。また、「学長は先月、私の母の絵を拝見しました。」は、尊敬語を使うべきところに謙譲語を使っているので間違いである。

刺激文中の登場人物の呼び方は、提示された刺激文のみで人間関係が把握できるように、必要に応じて役職名を付加した。また、より自然な日本語の文となるように、登場人物は名前ではなく苗字で呼ぶこととした。

2.2 刺激文の統制

尊敬語と謙譲語を直接比較するために、刺激文を統制した。まず、表2に示したように、刺激文の述部に用いる基本動詞を、尊敬語と謙譲語とで同一のものとした。さらに、これらは、動詞の活用の仕方による影響を相殺するため、敬語の特定形をもつ動詞ともたない動詞の2種類同数で構成されている。表2のように、尊敬語と謙譲語の両方に敬語の特定形をもつ動詞として選んだのは、「見る」「言う」「知る」の3つである。一方、敬語の特定形をもたない動詞で、尊敬語は「お～になる」、謙譲語は「お～する」の形をとる動詞として選んだのは、「返す」「待つ」「渡す」の3つである。これらの動詞は、尊敬語および謙譲語として使用する頻度が比較的高く、敬語として自然な表現になると思われる動詞を選定した。

これらの動詞1つにつき刺激文を3つずつ作成したので、尊敬語の刺激文は、正文と誤文の2種類×動詞6つ×3文=36文、謙譲語も同様に、正文と誤文の2種類

表2 刺激文に使用した基本動詞とその尊敬語と謙譲語

	基本動詞	尊敬語	謙譲語
敬語の特定形をもつ動詞	見る	ご覧になる	拝見する
	言う	おっしゃる	申し上げる
	知っている	ご存知だ	存じている
敬語の特定形をもたない動詞	返す	お返しになる	お返しする
	待つ	お待ちになる	お待ちする
	渡す	お渡しになる	お渡しする

×動詞 6つ×3文=36文で、合計72文である。さらに、統制群として、「斎藤君は昨日友達の吉田さんの絵を見ました。」のように敬語が用いられていない正文である基本文を18文作成した。また、これらの刺激文とは別に、ダミー文として、「母が作るケーキはとてもおいしい」のような、タイプの異なる文を10文作成した。

なお、本研究は、尊敬語と謙讓語の混同に焦点を絞っている。そのため、二重敬語の「おっしゃられる」のように、語形として間違いであると考えられている敬語は除外し、語形としては正しいが、尊敬語と謙讓語が機能的に誤って用いられているものを刺激文に用いた。

2.3 刺激文の録音と発話時間の調整

刺激文はすべて、同じ女性の音声で録音した。録音には、Sugi Speech Analyzerを用いた。本研究では、聴覚提示による反応時間測定実験の方法を用いたため、正文（肯定反応）と誤文（否定反応）のそれぞれで、尊敬語を含む文と謙讓語を含む文の発話時間を、Sugi Speech Analyzerを用いて調整した。表1の刺激文の例にあるように、各刺激文を構成する項の数は尊敬語を含む文と謙讓語を含む文とで同じで、「主語」「時を表す副詞」「目的語」「動詞」の順である。しかし、各文の文字数やモーラ数は必ずしも同じではない。そこで、刺激提示のキーを被験者が押してから刺激の聴覚提示が終了するまでの時間、つまり発音持続時間を均一にするため、刺激提示の終了時をそろえる形で発音持続時間を調整した。発音持続時間を調整する際には、尊敬語を含む文と謙讓語を含む文を直接比較できるように、両者の時間を各ペアでそろえた。たとえば、尊敬語の正文である「社長は昨日社員の鈴木部長の絵をご覧になりました。」が4,021 msであれば、謙讓語の正文「私は昨日上司の鈴木部長の絵を拝見しました。」もほぼ同じ持続時間の4,022 msになるように調整した。また、尊敬語のかわりに謙讓語を使用している誤文である「学長は先月、私の母の絵を拝見しました。」が4,206 msであれば、謙讓語のかわりに尊敬語を使用している誤文である「私の母は先月、学長の絵をご覧になりました。」も4,206 msに調整した。正文および誤文それぞれの発音時間の平均と標準偏差は、表3と表4に示した。

表3に示したように、正しく肯定するべき刺激文（正文）の発音持続時間の平均は、尊敬語を含む文が4,844 ms、謙讓語を含む文が4,844 ms、基本文が4,830 msとなるように調整した。この3条件の発音持続時間について、一元配置の分散分析で検討した。その結果、有意な主効果はなかった [$F(2, 34) = 1.144$, $p = .330$]。したがって、正しい尊敬語を含む文、正しい謙讓語を含む文、基本文の3者の結果を

表3 正しく肯定すべき刺激文の発音持続時間の平均と標準偏差

文の種類	刺激文の例	発音持続時間 (ms)	
		平均	標準偏差
尊敬語を含む文	社長は昨日、社員の鈴木部長の絵をご覧になりました。	4,844	509
謙讓語を含む文	私は昨日、上司の鈴木部長の絵を拝見しました。	4,844	508
基本文	斉藤君は昨日、友達の吉田さんの絵を見ました。	4,830	513

直接比較することができる。

次に、正しく否定すべき刺激文（誤文）についてであるが、表4に示したように、尊敬語のかわりに謙讓語を使用した誤文の発音持続時間の平均は 4,486 ms、謙讓語のかわりに尊敬語を使用した誤文の発音持続時間の平均は 4,487 ms に調整した。正文と同様に、誤文の2条件の発音持続時間について、一元配置の分散分析で検討した。その結果、有意な主効果はなかった [$F(1, 17) = 0.000$, $p = .993$]。したがって、尊敬語のかわりに謙讓語を使用した誤文と、謙讓語のかわりに尊敬語を使用した誤文は、結果を直接比較することができる。

表4 正しく否定すべき刺激文の発音持続時間の平均と標準偏差

誤りの種類	刺激文の例	発音持続時間 (ms)	
		平均	標準偏差
尊敬語のかわりに謙讓語を使用	社長は明日私の兄の家を拝見します。	4,486	632
謙讓語のかわりに尊敬語を使用	私の兄は明日社長のお宅をご覧になります。	4,487	633

2.4 被験者

広島県在住で日本語を母語とする大学生と大学院生の計24名（女性が19名、男性が5名）に対して実験を行った。被験者の年齢の平均は21歳6ヶ月で、標準偏差が3歳9ヶ月、最年長が38歳4ヶ月で、最年少が18歳8ヶ月であった。

2.5 実験の手順

刺激文は、正文が54文、誤文が36文、ダミー文が10文で、ちょうど100文である。これらをランダムに聴覚的に提示して、聴覚提示の始まりから被験者が正誤判断をするまでの時間と、その判断の正誤を記録した。被験者にはヘッドホンをつけ、ヘッ

ドホンから聞こえてくる文が正しいかどうかの判断をコンピュータのキー押しで行うように指示した。実験プログラムとしては、アメリカのアリゾナ大学のジョナサン・フォスターが開発した DMDX を使用した。

3. 結 果

3.1 正しく肯定するべき刺激文（正文）の反応時間の分析

尊敬語の正文と謙讓語の正文、および敬語表現を伴わない基本文の正誤判断に要する反応時間の平均と標準偏差を、表5に示した。

反応時間について、3条件（尊敬語・謙讓語・基本文）で反復測定による分散分析を行った。その結果、主効果が有意であった [$F_1(2, 46) = 10.09, p < .001$; $F_2(2, 34) = 23.47, p < .001$]。そこで、単純対比で3つの刺激文を比較したところ、尊敬語 [$F_1(1, 23) = 12.86, p < .01$; $F_2(1, 17) = 50.89, p < .001$] も謙讓語 [$F_1(1, 23) = 10.50, p < .01$; $F_2(1, 17) = 16.26, p < .001$] も、基本文よりも有意に長い反応時間を示した。やはり、敬語表現を伴った文は、敬語表現を伴わない文よりも長い処理時間が必要であった。

さらに、尊敬語と謙讓語を比較すると、尊敬語を含む文は謙讓語を含む文よりも有意に反応時間が長かった [$F_1(1, 23) = 5.56, p < .01$; $F_2(1, 17) = 5.57, p < .05$]。このことから、正しい敬語表現の場合、尊敬語を含む文のほうが謙讓語を含む文よりも判断が難しいのだと考えられる。

表5 聴覚提示された正しい敬語を含む文および基本文の正誤判断における反応時間

文の種類	刺激文の例	反応時間(ms)	
		平均	標準偏差
尊敬語を含む文	社長は昨日、社員の鈴木部長の絵をご覧になりました。	5,184	339
謙讓語を含む文	私は昨日、上司の鈴木部長の絵を拝見しました。	5,068	244
基本文	斉藤君は昨日、友達の吉田さんの絵を見ました。	4,963	168

注1: $n=24$.

注2: 反応時間は、文の聴覚提示時間を含んでいる。

3.2 正しく肯定するべき刺激文（正文）の誤答率の分析

尊敬語の正文と謙讓語の正文、および敬語表現を伴わない基本文の正誤判断の誤答率の平均と標準偏差を、表6に示した。

表6 聴覚提示された正しい敬語を含む文および基本文の正誤判断における誤答率

文の種類	刺激文の例	誤答率(%)	
		平均	標準偏差
尊敬語を含む文	社長は昨日、社員の鈴木部長の絵をご覧になりました。	10.6%	16.5%
謙譲語を含む文	私は昨日、上司の鈴木部長の絵を拝見しました。	13.7%	12.4%
基本文	斉藤君は昨日、友達の吉田さんの絵を見ました。	0.7%	1.9%

注1: $n=24$.

誤答率について、3条件（尊敬語・謙譲語・基本文）で反復測定による分散分析を行った。その結果、主効果が有意であった [$F_1(2, 46) = 8.68$, $p < .001$; $F_2(2, 34) = 11.17$, $p < .001$]。そこで、単純対比で3つの刺激文を比較したところ、尊敬語 [$F_1(1, 23) = 8.28$, $p < .001$; $F_2(1, 17) = 18.52$, $p < .001$] も謙譲語 [$F_1(1, 23) = 27.49$, $p < .001$; $F_2(1, 17) = 26.50$, $p < .001$] も、基本文よりも有意に高い誤答率を示した。やはり、敬語表現を伴った文は、基本文よりも誤答率が高かった。

これに対して、尊敬語の正文と謙譲語の正文の誤答率には有意な違いはなかった [$F_1(1, 23) = 0.66$, $p = .425$; $F_2(1, 17) = 0.70$, $p = .416$]。つまり、判断するまでの時間ではなく、最終的な判断である誤答率で見た場合には、尊敬語を含む文と謙譲語を含む文の難易度は同じであるという結果であった。

3.3 正しく否定すべき刺激文（誤文）の反応時間の分析

尊敬語のかわりに謙譲語を使用している誤文、謙譲語のかわりに尊敬語を使用している誤文の正誤判断に要する反応時間の平均と標準偏差を、表7に示した。

2つの誤りの種類について分散分析を行った結果、誤った敬語を含む文を正しく否定するための時間は、尊敬語のかわりに謙譲語を使用した場合の方が、謙譲語の

表7 聴覚提示された誤った敬語を含む文の正誤判断における反応時間

誤りの種類	刺激文の例	反応時間(ms)	
		平均	標準偏差
尊敬語のかわりに謙譲語を使用	社長は明日私の兄の家を拝見します。	5,097	450
謙譲語のかわりに尊敬語を使用	私の兄は明日社長のお宅をご覧になります。	4,726	411

注1: $n=24$.

注2: 反応時間は、文の聴覚提示時間を含んでいる。

かわりに尊敬語を使用した場合よりも有意に長かった [$F_1(1, 23) = 23.52, p < .001$; $F_2(1, 17) = 53.88, p < .001$]。このことから、尊敬語のかわりに謙譲語を使用した場合のほうが、正誤判断が難しいのだと考えられる。

3.4 正しく否定するべき刺激文（誤文）の誤答率の分析

尊敬語の誤文と謙譲語の誤文、および敬語表現を伴わない基本文の正誤判断の誤答率の平均と標準偏差を、表8に示した。

誤答率について、3条件（尊敬語・謙譲語・基本文）で反復測定による分散分析を行った。その結果、尊敬語のかわりに謙譲語を使用した場合の方が、謙譲語のかわりに尊敬語を使用した場合よりも、誤答率が有意に高かった [$F_1(1, 23) = 26.53, p < .001$; $F_2(1, 17) = 36.48, p < .001$]。このことから、反応時間だけでなく誤答率においても、尊敬語のかわりに謙譲語を使用した表現の正誤判断が難しいことが示唆された。

表8 聴覚提示された誤った敬語を含む文の正誤判断における誤答率

誤りの種類	刺激文の例	誤答率(%)	
		平均	標準偏差
尊敬語のかわりに謙譲語を使用	社長は明日私の兄の家を拝見します。	26.9%	15.3%
謙譲語のかわりに尊敬語を使用	私の兄は明日社長のお宅をご覧になります。	9.7%	9.6%

注1: $n=24$.

4. 考 察

本研究では、尊敬語と謙譲語を比較すると謙譲語のほうが難しいのではないかという仮説のもとに、聴覚提示された敬語を含む文の正誤判断課題実験を行った。その結果、以下のことが明らかになった。

第一に、仮説に反して、謙譲語のほうが尊敬語よりも難しいとは言えない結果が得られた。正しく肯定するべき刺激文（正文）の場合には謙譲語を含む文、また、正しく否定するべき刺激文（誤文）の場合には、謙譲語のかわりに尊敬語を使用している誤文のほうが、反応時間が短かった。これらは共に、主語が「私」または「私の家族」で始まり、述部に謙譲語が要求される文である。誤答率を見ても、正文においては謙譲語と尊敬語の間に有意な差は見られなかったが、誤文においては謙譲語のかわりに尊敬語を使用している誤文のほうが誤答率が低く、反応時間と同様の

傾向を示していた。この結果は、謙譲語のほうが尊敬語よりも難しいという一般的な認識とは異なっている。

しかし、本研究が聴覚提示実験であるということを考慮に入れると、妥当な結果であると言える。従来の敬語研究においては、主に質問紙による調査が行われている。これらの調査は視覚提示によるものであるため、被験者は刺激文の主語と敬語動詞を何度も見比べて照合することができる。一方、本研究で採用した聴覚提示実験においては、被験者は敬語動詞を聞いたあと、もう一度主語と敬語動詞を見比べて両者の整合性を判断することはできない。そのため、主語を聞くと同時にその先を予測する即時処理が、視覚提示の場合よりも促進されるのだと考えられる。このような場合、敬語の「人称暗示」的機能（菊池，1997）が、敬語表現の予測に影響を与えていると考えられる。

この「人称暗示」的機能とは、敬語を主語と結び付けて捉えたもので、私や私の家族といった話手側の領域の人物が主語のときには謙譲語を使い、相手側の領域の人物が主語のときには尊敬語を使うという敬語の働きを指している。例えば、店で大き目の品物を買ったとき、店員が「お持ちしますか」と言えば「私が持って行きましょうか（あとで配達しましょうか）」の意となり、「お持ちになりますか」と言えば、「あなたが持って帰りますか」の意となる（菊池，1997）。この「人称暗示」的機能が敬語に備わっていることによって、主語が明示されていない場合には敬語から主語をボトムアップで類推することができる。逆に、本研究の刺激文のように主語が明示されている場合には、主語と敬語の共起制限から後続の敬語が予測できる。したがって、本研究では、敬語の「人称暗示」的機能が主語から動詞へのトップダウンの形で働き、被験者は主語を聞いた時点で後続の敬語表現を予測しながら課題を行ったのだと考えられる。そして、主語から敬語表現を予測する場合、主語が「私」または「私の家族」のような話手側の領域の人物、つまり敬語的一人称のほうが、後続の謙譲語の予測が容易なのであると思われる。

この理由として、主語が敬語的一人称の場合には、本研究の刺激文のように、主語が敬語的三人称の場合よりも主語と補語の間の人間関係を把握しやすいのだと考えられる。つまり、敬語的一人称の場合には主語のバリエーションが「私/私の家族」という一種類に限定されるため、主語と補語との組み合わせの数は補語のバリエーションのみによって決まる。これに対して、主語が三人称の場合には、主語のバリエーションは設定する人物の属性によってさまざまであるため、主語と補語との組み合わせも「主語のバリエーション」×「補語のバリエーション」となり、多様性が増す。このように、主語が入力された時点での、後続する表現の予測可能性の多寡

が、予測の難易度に、ひいては敬語表現の正誤判断の難易度に影響しているのだと考えられるであろう。

後続する言語表現の予測に関しては、文を読む場合と聞く場合の両面から、これまでにさまざまな研究がなされてきた（寺村，1987；大野他，1996；杉山他，1997；石黒，2001）。これらと同様に、「人称暗示」的機能をもつ敬語も、後続の表現が予測しやすい言語表現であると言えよう。しかし、これは、敬語の語形と機能について、使用者が正しい認識をもっているということが前提である。菊地（1997）が指摘するように、尊敬語と謙譲語の区別が不分明になっていけば、「敬語使用の根本をなすともいえる＜人称暗示＞的機能の成立が保証されなくなり、コミュニケーションに支障をきたしかねなくなる」（菊地，1997）。敬語の「人称暗示」的機能が後続の敬語表現の予測に影響している可能性があるという本研究の結果は、敬語の語形と機能を正しく認識することの重要性をも示唆していると言えるであろう。

第二に、本研究では、正しい敬語を含む文の分析において、正誤判断までの時間は尊敬語よりも謙譲語を含む文のほうが有意に早い、最終的な判断である誤答率で見た場合には、本実験で使用した尊敬語を含む文と謙譲語を含む文の難易度は同じであるという結果が得られた。このことから、厳密に難易度をはかる場合には、質問紙調査よりも反応時間の測定のほうが適切であることが示唆された。

引用文献

- 石黒圭（2001）「句の説明の予測—予測の読みの一側面—」『一橋論叢』第126巻第3号，276–289
- 大野早苗・堀和佳子・八若寿美子・池上摩希子・内田安伊子・郭末任・許夏珮・長友和彦（1996）「予測文法研究—後続文完成課題から見た日本語母語話者と日本語学習者の予測能力について—」、『日本語教育』91号，73–83
- 菊池康人（1997）『敬語』，講談社
- 国立国語研究所（1983）『敬語と敬語意識—岡崎における20年前との比較—』，三省堂
- 杉山ますよ・田代ひとみ・西由美子（1997）「読解における日本語母語話者・日本語学習者の予測能力」、『日本語教育』92号，36–47
- 寺村秀夫（1987）「聴き取りにおける予測能力と文法的知識」、『日本語学』第6巻第3号，56–68，明治書院
- Yamashita, M. Yoriko（1983）“An Empirical Study of Variation in the Use of Honorific Forms in Japanese: An Analysis of Forms Produced by a Group of women in Urban setting”, U-M-I Dissertation Information Service.

付記：本稿は、科学研究費補助金 基盤研究（C）「中国語または韓国語を母語とする日本語学習者の敬語能力に関する実証的研究（平成19–21年度，代表者：宮岡弥生，課題番号：19520468）の成果の一部である。